

## <公開講演>

### 新たな視点から見た口腔と全身疾患

日本大学歯学部 特任教授 落合 邦康



- 1973年 日本大学農獣医学部（現：生物資源科学部） 獣医学科卒業  
日本大学松戸歯科大学 細菌学教室 副手
- 1975年 同・助手
- 1978～80年 Alabama 大学 Birmingham 校博士研究員
- 1994年 日本大学松戸歯学部 細菌学教室 講師
- 2000年 明海大学歯学部 口腔微生物学講座 教授
- 2005年 日本大学歯学部 細菌学講座/総合歯学研究所 生体防御部門 教授
- 2016年 日本大学特任教授  
現在に至る。

慢性炎症性疾患・歯周病がさまざまな全身疾患の誘因となることが広く報告されてきました。詳細な機序の解明にはまだ時間がかかるとは思われますが、う蝕時代に比べ、口腔がはるかに注目を浴びていることは間違いありません。全身疾患の詳細な発症機序の解明や予防法の開発には、医学を中心としたさまざまな異分野との協力が必須です。

われわれは「新たな視点から口腔と全身疾患を見直し、それを元に、全身から口腔を考える」という理念「歯学的医学」に基づき研究を行い、以下の情報発信をしまいいりました。すなわち、歯周病原細菌や歯周病は以下の影響を及ぼす可能性がある：①歯肉局所の免疫担当細胞に影響を与え免疫応答を低下させる。②歯周組織内の神経細胞にストレスを与え痛覚を麻痺させる。③健康なプラーク構成細菌叢を破壊し病原性プラークへの遷移を促進する。④潜伏感染 HIV、EBV を再活性化し、AIDS や EBV 関連難治性全身疾患発症の誘因となる。⑤口腔がんをはじめ各種がんの発生・進展のリスクを高める。⑥歯周組織細胞に持続的な酸化ストレスを誘導し炎症を起こす。また、血液細胞にも影響を及ぼし、難治性全身疾患の誘因となる。⑥認知症関連物質の産生量を増加し、発症の誘因となる。⑦口腔細菌はインフルエンザウイルスの感染を促進し、さらに、抗インフルエンザ薬の効果を低下させる。

歯周病については「血液を介し口腔の情報が全身に伝わり、全身の情報は口腔に伝わる」ことが明確に説明でき、異分野への情報発信がより効果的に可能となります。日本細菌学会の祖・北里柴三郎博士は、「医学の究極の目的は予防に有り」といわれましたが、歯科医療も例外ではありません。直面している医療費問題や歯科界のより一層の発展のためには、健康長寿における口腔の重要性を広く国民が理解し、口腔に対する意識向上が必要となります。全ての歯科医療従事者は、口腔のみならず、口腔を取り巻く環境、つまり、全身の生理機能や加齢変化、そして、免疫などさまざまな関連領域における専門性の高い基礎知識を持つことが重要といえるのではないのでしょうか。